

第68回国際学生会議 事業報告書



目次

序章

1. 代表挨拶
2. 団体理念
3. 団体沿革
4. 総合テーマ

第1章

1. 第68回国際学生会議 実行委員名簿
2. 実行委員会総括
3. 広報活動報告
4. 渉外活動報告

第2章

1. 事前招集会開催総括
2. 事前招集会日程概要
3. 学術交流総括

第3章

1. 会議概要
2. 会議日程概要
3. 参加者名簿
4. 全体総括
5. 分科会総括
6. 各分科会総括
7. 成果発表会
8. 後援団体による共同イベント
9. 日本在住学生向け交流企画

終章

1. 謝辞
2. 活動の様子
3. ご協力いただいた方々

序章

代表挨拶
団体理念
団体沿革
総合テーマ



1.代表挨拶

国際学生会議とは、1954年に第一回を開催して以来、毎年夏の2週間、世界20ヶ国以上の学生が日本に集まり、寝食を共にしながら様々な議論や文化交流を行う学生団体です。

昨年度、私は初めて国際学生会議にテーブルチーフとして参加しました。参加に当たって、私自身のオランダでの留学経験がきっかけとなりました。約2年前にアムステルダム大学へ入学して以来、毎日が新しい発見と学びで溢れており、本当に素晴らしい経験をさせて頂いていると実感しています。大学での勉強はもちろんですが、私にとって海外留学の魅力は国際交流の楽しさにあります。自分とは全く違う文化背景を持つ仲間と時を過ごす中で、自分自身を見つめ直す機会が増えただけでなく、他人の個性や考え方をより尊重するようになりました。そのような、新しい人と出会い、自分と向き合うような経験を学術会議・文化交流を通じてより多くの学生に共有したいという思いを抱き、第67回国際学生会議に参加しました。

さて、国際学生会議は今年で第68回目を迎えます。昨年は、社会がコロナ禍にあり、活動において不安や懸念も少なくはありませんでした。しかし、実際にはオンラインでの開催が世界中の学生に参加機会を与え、国境を越えた学生同士の団結・交流を図ることができました。また、その経験から、あらゆるリスクの可能性を理解し、社会の変化に対して果敢に対応する機敏性の大切さを学びました。そして本年度は、団体を将来の成長に繋げていくために必要なこと、すなわち、中長期的な視点でポストコロナも見据えた時に、私たちが取り組むべき課題に焦点を当てていきたいです。特に、国内外にある外部団体との更なる協力、運営メンバーの活動環境の見直しは、団体の持続的成長に直接関係していると考えます。こうした変化によって、世界中の学生にとってさらに魅力的な活動プログラム、また、団体としての姿を提供したいと強く思います。

今来、多くの方々に格別のご厚情を賜り、心より感謝しております。国際学生会議に於きましても、日本を本部として世界の国々の学生を代表する国際組織として邁進して参りますので、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

第68回国際学生会議 代表
川口 実のり

2. 団体理念

国際学生会議の理念として、大きく分けて世界平和への貢献、学生の主体性の養成、多様性の尊重、社会への貢献の4点が挙げられます。

当団体の最大の目的は、国際社会の繁栄と秩序の安定に寄与し、最終的に世界平和に貢献することです。平和は国際社会が長年追い求めてきた目標であり、社会の一員である個人が目標達成に向けて努力することが求められています。しかし、平和といっても一概に定義することは容易ではなく、紛争や対立がない世界を実現するだけでは十分とは言えません。そこで私たちは、近年注目されている「人間の安全保障」という概念を重要視し、誰一人取り残されない社会こそが目指すべき世界平和であると考えます。そして、学生である我々が当事者意識を持ち、如何にして世界平和実現のために行動を起こしていくべきかを熟考します。

学生自身が主体的に物事を考え、行動に移す力を養うことは非常に大切です。自分たちの可能性に気付き、自分の身の回りや世界で起こっている問題に目を向けることで問題意識を高めることができ、創造的な発想や批判的思考力を身につけることができます。当団体の取り組みの中でも、参加者が自主的な判断ができる機会を提供し、一人一人が主体性を養うことを促しています。感受性が豊かな学生という時期に培った自信と経験は、将来に繋がる大きな糧となることを信じています。

さらに、今日の国際的な環境において、「多様性」という要素は重要な概念です。世界中の多種多様な人々の交流において個性や経験を尊重することは不可欠であり、多様性が受け入れられる社会の実現に尽力することは当団体の大きな使命の一つです。また、異なる文化や環境の中で生まれ育ち、多様な価値観を持つ学生たちは、参加者の知見と会議の議論の幅を広げる非常に意義深い存在です。会議期間中の密度の濃い交流が、より実りの多い学術的成果を生み出すはずです。

忘れてはならないのが、現代社会において学生の影響力はそこまで大きくないとはいえ、学生も社会の中で重要な存在であり、積極的な社会参加と社会貢献が求められているということです。学生の提言は実装に繋がるものではないかもしれませんが、しかし、我々は社会的要因や国益等のしがらみに縛られない、学生ならではの革新的な意見を大切にし、実際の会議の成果を様々な形で社会に発信していきます。さらに、会議終了後にも会議で培った問題意識や探究心を継続させ、参加者自身がそれぞれの形で社会の原動力となっていくという自覚と責任を持つように呼びかけています。

3.団体沿革

1934年 第1回日米学生会議（国際学生会議の母体）：

「世界の平和は太平洋の平和、太平洋の平和は日米間にあり、然してこの現実には若き日米学生の間に於ける率直な意見の交換、及び相互理解の信頼を促進しなければならない」という提唱文の下、青山学院大学にて開催。

1941年：日米開戦により会議は開催されず。

1947年 第8回日米学生会議：

戦争の反省を踏まえ、「各国の親善と正しい理解こそが国際平和達成への唯一の道である」という認識下、日本で開催。

1954年 第15回日米学生会議：

アメリカで行われた会議を最後に日米学生会議は発展解消。

1954年 第1回国際学生会議：

12カ国から84名の外国人が参加。28日間にわたり、東京、関西、北海道、仙台で開催。

1962年 第9回国際学生会議：

団体代表者会議を新たに設置。以後の会議の充実と参加団体間の強い結束を目指す。

1964年 第16回日米学生会議：

国際教育振興会により復活。

1968年：学生運動の影響で日本国際学生協会の中央委員会が分裂。

1970年 第16回国際学生会議：

国際学生会議の再開。

1991年 第37回国際学生会議：

帯広市との協力により、市民の方と国際交流体験を共にする。

2003年：SARSの大流行により、国際学生会議は開催されず。

2014年 第60回国際学生会議：

60回の節目を迎える。

2018年 第64回国際学生会議：

史上最多である23カ国から学生が参加。成果発表会で国連開発計画駐日代表である近藤哲生氏による基調講演。

2019年 第65回国際学生会議：

成果発表会にて国連開発計画駐日代表である近藤哲生氏による基調講演、国連教育科学文化機関アジア太平洋地域事務所長の青柳茂氏によるクロージングスピーチ。

2020年 第66回国際学生会議：

新型コロナウイルス感染症の拡大により、事前招集会及び本会議のプログラムを中止。初の試みとなる、全てオンラインでのイベントを開催。

2021年 第67回国際学生会議：

新型コロナウイルス感染症の影響が引き続き、約4ヶ月間のオンライン会議を開催。

2022年 第68回国際学生会議



4.総合テーマ

Big Step: New chapter in the story of the global society and our lives 大きな前進：グローバル社会の変革・私たちの生き方の改革

2022年ー今日の国際社会は、ポストコロナの時期に差し掛かっているとメディアでは大きく取り上げられています。しかし、感染者数が減少しているとはいえ、感染症爆発のリスクが無くなったわけではなく、国際政府は経済社会の安定に向けて、さらに慎重な政策を打ち出していく必要があると考えます。実際に日本国内では、感染者数の再増加が確認され、ますます、社会のこれからの行く末が懸念されているのではないのでしょうか。一方で、コロナ禍は、様々な側面において、グローバル社会に劇的な変化をもたらしました。その変革を詳細に見ていく中で、可視化された社会問題も多くありました。第68回国際学生会議では、このような変化の時期の中で世界が取り組むべき課題について考え抜き、近未来の世界に対して実行性のある提言を行います。さらに、このテーマには、学生参加者と私たち自身への変化の期待が込められています。事前招集会から始まる約2ヶ月のプログラムにおいて、世界から集まる学生参加者がお互いに学び、高め合い、自分を大きく変化させる。そのような機会を実行委員一同で提供したいと強く願います。そして、本年度の私たちの活動が、グローバル社会全体・参加者の人生、両方に対する後押しとなることを目標としています。

第68回国際学生会議
代表 川口 実のり



第1章

第68回国際学生会議 実行委員会

実行委員会名簿

実行委員会総括

広報活動報告

渉外活動報告



1.第68回国際学生会議実行委員名簿

代表	川口 実のり（かわぐち みのり） Universiteit van Amsterdam, Politics, Psychology, Law and Economics (PPLE) 3年
副代表	金高 哲大（かねたか よしひろ） 早稲田大学 国際教養学部国際教養学科 3年
会議取締役	Mai Lan Tran（マイ・ラン・チャン） Academy of Journalism and Communication, Faculty of International Affairs 3年
財務	落合 舞（おちあい まい） Temple University Japan Campus, International Business Studies (Computer Science) 3年
学術	Rahma Selim（ラフマ・セリム） Universiteit van Amsterdam, Politics, Psychology, Law and Economics (PPLE) 2年 Amyra Aliya Kamila（アミーラ・アリヤ・カミラ） University of Indonesia, French Studies (Humanities) 3年 Priyal Tale（プライヤル・テール） Tata Institute of Social Sciences, Mumbai, Master of Arts in Social Work (Community Organization & Development Practice) 2年 Yingjiao Qiu（仇 英嬌） 日本大学 国際関係学部国際総合政策学科 3年
総務	Minhwa Jeong（鄭 民和） 早稲田大学 国際教養学部国際教養学科 3年

渉外

田中 陽子（たなか ようこ）

Universiteit van Amsterdam, Bachelor of Political Science 1年

小林 未侑（こばやし みゆ）

明治大学 情報コミュニケーション学部情報コミュニケーション学科 3年

Maria Fransisca（マリア・フランシスカ）

帝京大学経済学部経営学科 2年

広報

高木 萌々佳（たかぎ ももか）

名古屋市立大学 人文社会学部国際文化学科 4年

尾崎 翔太（おざき しょうた）

名古屋市立大学 人文社会学部国際文化学科 4年

Evan Agustian Lukius（エヴァン・アグスティアン・ルキウス）

Maranatha Christian University, Informatics (Information Technology) 3年

企画

Rascia Angelica Roldan（ラシア・アンジェリカ・ロルダン）

University of the Philippines Manila, Area Studies 4年

John Lester Teña（ジョン・レスター・テーナ）

Polytechnics University of the Philippines, Journalism 3年



2.実行委員会総括

文責 川口 実のり

本年度の第68回国際学生会議開催にあたり、企画本部である実行委員会は様々な問題点に直面しました。68年も続いた我が団体の活動がよりたくさんの人々に影響を及ぼし、より国際化していけるよう、まず、会議開催の基盤となる実行委員会の構成や活動内容の改善に焦点を当てました。

改善点は主に3つに分けられます。まず、実行委員会の構成にあたり、これまでは日本在住・日本人学生が実行委員の大きな割合を占めていました。確かに、日本在住の学生の存在は日本国内で会議を行うにあたり、とても重要であり、日本国内での事務・運営作業には欠かせないものであります。しかしながら、会議の企画において、日本在住者からの目線だけでなく、海外在住者の目線を取り入れることが、団体の国際色をより深めていけるのではないかと考えました。よって、本年度の実行委員会では、17名中8名が海外在住の学生、3名が日本在住の留学生、6名が日本在住の日本人学生で構成されています。その結果は特に文化交流企画中に明らかに表れ、従来のように日本の文化を海外の学生に共有するだけでなく、より多様な文化的視点で各イベントを行うことができました。

二つ目は、団体の目標として、より多くの学生に対して海外留学を促進するという項目を掲げ、実行委員中17名のうち12名が海外留学経験者で構成されています。結果として、本年度の会議期間中には、実行委員が参加者の学生に向けて自身の留学経験を語る場面が多く見られました。このように、本年度の実行委員会はより多様な国際的背景を持つメンバーで構成されたため、よりグローバルな環境で会議を企画することができました。結果として、会議終了後に、私たちは、多くの参加者から留学に行ってみたくなったというコメントを受けました。さらに喜ばしいことに、参加者のうち数名は、実際に海外に留学したと報告しました。

最後に、本年度は団体の規模拡大のため、他団体・企業との繋がりに焦点を当てました。まず、私たちは、各大学の国際交流団体と共同イベントを開催しました。それによりより多くの大学生に、団体を認知してもらうことに成功しました。さらに、それらの団体は、国際交流を促進することを目的とするにもかかわらず、海外に住む外国人学生との繋がりに苦労することが主な課題でした。そこで、我が団体の海外在住参加者・実行委員と共にイベントを開催することで、そのような問題を解決することに繋がりました。また、本年度は、過去に支援していただいた企業の方々に加え、新しい協賛企業の皆様から賛同をいただくことができました。これから、団体の規模が少しずつ大きくなっていくにつれ、外部の方々との横の繋がり、また、OBOGの方々との縦のつながりを共に大切にしていきたいと考えています。

3.広報活動報告

ウェブサイトのモデル改善

国際学生会議ではWixを用いてホームページを運営しています。はじめに変更した点として、各文字のフォントや文字の大きさを変更し、日本語の訳が正確でない部分を修正しました。また、ウェブサイト上の各ページのカテゴリーやデザインを見やすく工夫することで、より多くの人に私たちのサイトにアクセスしてもらうことを目指しました。特に、これまでイベント内で撮影した写真や実行委員のプロフィール情報を公開し、団体の概要やイベント内容をより明らかにしました。その他の変更点や、工夫点は実際にISC公式ウェブサイトでご覧いただけます。（ISC公式ウェブサイト：<https://ja.japan-isc.org/>）

SNS上での広告改善

昨年度と比べ、全投稿で使用するデザインは、統一感を出すために、テーマカラーである水色と補色であるオレンジをデザインに使用しました。インスタグラムやTwitterに投稿する際のハッシュタグは、同じハッシュタグを何度も使用すると投稿がうまく発信されない可能性があるため、ハッシュタグをランダムに選択できるように新たにハッシュタグを集めたスプレッドシートのファイルを作成しました。さらに発展したSNSの企業を活用し、他団体とメディアパートナーとして交流を深めました。具体的に説明すると、両団体での交流イベントを開催した後、団体の情報や、イベントの詳細などを互いのSNS上で発信し合いました。最後に、SNS上に誰もが投稿できる質問ボックスを設置し、ISCについての質問を募り、その回答をインスタグラムにて共有しました（ISCInstagramアカウント：<https://www.instagram.com/japan.isc/>）。

各大学での広報活動

最後に、より多くの大学生に我が団体の活動を認知してもらうため、国際系のサークルや、大学へ、イベントの情報や、本会議の参加者募集の旨を記した案内メッセージを広報してもらいました。我が団体のウェブサイトやSNSだけでなく、実際に学生が普段目にするプラットフォームの力を借りることで、より効果的な広報活動を試みました。

SDGsアワードについて

今年度はISCの歴史上で初となるSDGsアワードに挑戦しました。SDGsアワードとは、SDGs達成に取り組む若い世代を応援するもので、2018年に設立された朝日新聞主催のプロジェクトです。

(<https://www.asahi.com/sdgs/article/14460136>) 私たちは第68回国際学生会議を開催するというテーマの下で申し込みを行いました。それぞれの分科会に関連するSDGsのゴールを説明し*、世界中の学生と議論し、それぞれのゴールに向けて社会に大きな影響を与えることを約束しました。残念ながら二次審査に進むことはできませんでしたが、私たちにとって、本会議の分科会とSDGsの繋がりを知り、またそれらを意識することの出来る良い機会になりました。

***第68回国際学生会議における分科会とSDGsゴールの関係性**

テーブル1 「ジャーナリズム： フェイクニュースと偽情報の現象」

SDGsゴール4 「質の高い教育をみんなに」

SDGsゴール16 「平和と公正をすべての人」

SDGsゴール17 「パートナーシップで目標を達成しよう」

テーブル2 「近年の海洋法の動向に関して」

SDGsゴール14 「海の豊かさを守ろう」

SDGsゴール16 「平和と公正をすべての人に」

テーブル3 「都市の未来構想に一歩足を踏み入れる：スマートで持続可能な都市とは」

SDGsゴール10 「人や国の不平等をなくそう」

SDGsゴール11 「住み続けられるまちづくりを」

SDGsゴール17 「パートナーシップで目標を達成しよう」

テーブル4 「ソーシャルワーク：平和と人権の保護に向けての大きな一歩」

SDGsゴール4 「質の高い教育をみんなに」

SDGsゴール10 「人や国の不平等をなくそう」

SDGsゴール16 「平和と公正をすべての人に」

SDGsゴール17 「パートナーシップで目標を達成しよう」

外部学生団体との共同イベント

KOLMI ENGLISH

2022年3月20日、私たちは、Kolmi Englishとのコラボレーションウェビナーを開催しました。まず、我が団体の代表：川口が「How to be A Killer Opener」と題してウェビナーを学生向けに行いました。その後、Kolmi Englishの代表Angelにより、英語でのライティングに関するワークショップを行いました。イベント中は、参加者からたくさんの質問が投げられ、アクティブな雰囲気イベントを終えることができました。イベントの録画はこちらのYouTubeリンクから閲覧することができます。

HUIT

2022年6月26日、第68回国際学生会議では、北星学園大学国際チーム（HUIT）とのコラボレーションイベントを開催しました。両組織の紹介を行ったのち、ゲームを行い、参加者同士の交流を計りました。ゲーム終了後のブレイクアウトセッションでは、参加者がカジュアルに自己紹介を行ったり、交流する機会を設けました。さらに、2回目のブレイクアウトセッションでは特定のトピックに従って議論を行いました。ご参加いただいた皆様に、改めて感謝申し上げます。

ICC

2022年5月28日、第68回国際学生会議にて、両組織の連携を密にするため、国際コミュニティサークル(ICC)とのコラボレーションが行われました。このイベントでも、まず、ICCとISCのメンバー紹介があり、その後、分科会に移りました。この分科会では、40分のフリートークで、賑やかに交流が行われました。



4. 渉外活動報告

渉外部では主に、企業協賛、クラウドファンディング、OBOGの三つ活動を中心に一年間活動を行ってまいりました。活動を通して、財政的な面のみならず、活動全般に関する様々な助言を賜り、第68回国際学生会議を無事開催することができました。これまでご支援・ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。

－企業協賛－

第68回国際学生会議では、弊団体が掲げる四つの団体理念に乗っ取り、今年度も多くの企業様から我々の活動にご賛同いただき、ご支援ご協力を賜りました。

我々の主な活動内容としては、弊団体の理念や活動の目的、今年度分科会テーマに関連がある企業様との繋がりを促進し、オンラインや対面でのミーティングを通して、それぞれのビジョンを最大化できるような方策を検討することが挙げられます。特に今年度は、弊団体の軸となる理念「世界平和への貢献」に多くの賛同をいただき、企業渉外としての交渉をさせていただいただけでなく、世界の現状に対する意見の交換も行い、企業様方のそれぞれの理念に対する熱い想いを伺うことができました。

加えて、企業の方々に様々な面でお力添えをいただいたこともあり、社会的な活動を行う団体の一人として、それぞれの実行委員が自身を成長させることができたと感じております。企業の方々にメールなどを通じてご連絡を入れることさえ経験したことがなく、初めは渉外を担当したメンバー全員は不安を抱える中、活動を行ってまいりましたが、成功や挫折を多く経験することで、弊団体理念の一つでもある「（学生の）主体性」を身に付けることができました。

最後に、コロナパンデミック等の情勢が不安定な中でも、弊団体の活動に継続的なご支援を賜りました旨、御礼申し上げますとともに、未熟ながらも我々の渉外活動を支援し、暖かく見守ってくださった企業の方々に、改めて大変感謝申し上げます。これまでの活動経験を生かし、弊団体として、そして一個人として、更に成長していくために、これからも尽力して参ります。そして、弊団体の今後の活動についても引き続きご支援いただけますと幸いです。

ークラウドファンディングー

はじめに、前年度に引き続き、第68回国際学生会議においても多大なるご支援をいただいたこと、誠に感謝いたします。クラウドファンディングでは、個人・企業を問わず弊団体の理念に共感いただけた方に、目標金額であった10万円を上回る約15万円ものご協力を賜りました。OB・OGの方をはじめとし、多くの方に賛同していただいたことは、今後もこの活動が継続されていくべきだという我々の想いをますます強めてくれました。

クラウドファンディングを行うにあたり、前年度の見直しに加え、クラウドファンディングの周知などを広報とともに行いました。具体的には、プランの修正、開催時期の検討、概要文の作成などをチームで再検討し、広報と連携を密にとりながら、カウントダウン投稿などを行いました。

皆様から受け継いだ「想い」のバトンを未来に繋いでいけるよう、今後も邁進して参ります。

ーOBOGー

This year ISC68 received much direct and indirect support from its alumni. Their support aims to help the administrators run the conference smoothly and effectively.

The International Students Conference was founded in 1953 and has been held annually until the 68th year. The 68 years of ISC have created thousands of excellent former students worldwide. The purpose of the OBOG event is to establish a warm and close connection with ISC graduates. The alumni play an essential role for ISC every year because, with their help, we can get donations through crowdfunding and work together to spread the word about ISC in their circles. In addition, we keep in touch with the alumni through SNS and do some online and offline events. Alumni look forward to this activity because it gives them a chance to reminisce about their days with ISC and meet old friends and even new friends from other years. In addition, graduates can learn about what is going on in ISC each year.

We met many alumni and learned many things from them. We had the opportunity to learn more about ISC, which offers unique experiences every year. We got to hear what problems people face after university and get an idea of what we must prepare for during our time as students. So many outstanding alumni now work at a consultancy or IT firm or have even started their own businesses. OBOG's activities teach us how important it is to constantly develop one's communication skills and learn how to work as a team to organize events effectively.

This year we held four events with the Alumni. Three online events and one offline event. First, before planning the event, we connected with one alumnus, who became the bridge to other alumni via Facebook. We decided to host four events this year, where at that time, the offline event was still dependent on the pandemic situation in Japan. Each event was ensured by the participation of several other committee members. The first event was in March on Zoom in English. This event involved several committee members outside of Japan as well. The second and third events were in April and May and were held in Japanese. The three events allowed current members to learn from alumni about past experiences and challenges while enjoying a casual environment. The events were also accompanied by games which were well received by the participants. All three events were successful and received good feedback from the participants and other committee members who helped with planning. The last offline event was held in July at a restaurant in the Shibuya area, where all alumni who are currently in Japan participated. The events were successful with the support from alumni and the cooperation of the committees in planning each event well.

We want to thank the alumni for their support which has been invaluable to the organization especially given the challenges of COVID-19. With their help, we were able to organize this year's conference. Although this year's conference may have ended, we will continue asking for your cooperation and support in future conferences. Thank you!



第2章

事前活動

事前招集会開催総括
事前招集会開催・日程概要
学術交流総括



1. 事前招集会開催総括

文責 川口 実のり

2022年5月25日から5月26日の二日間、事前招集会はオンラインにて開催されました。本会では、全ての参加者が初めて顔を合わせ、本年度のプログラム開催に当たっての意気込みを共有する場となりました。また、実行委員と団体の説明も再度詳しく行われました。

事前招集会1日目は、本年度のプログラムの概要説明を行ったあと、テーブルごとにZoomでブレイクアウトルームを作成し、アクティビティを設けました。参加者同士はこのイベントが初顔合わせだったため、初めはとても緊張していたように見受けられました。そのため、アクティビティ中は、参加者全員に話す機会が与えられ、オンラインの状況下でも参加者同士が距離を感じることなく楽しむことができるような企画を用意しました。その結果、1日目の最後には多くの参加者が感想を共有し、会話を楽しんでいるようでした。このようにして、私たちは、本年度のプログラムの開会を宣言し、2日目に繋げました。

2日目は、プログラム開催にあたり参加者・実行委員ともに準備をする場となりました。まず、実行委員が第68回国際学生会議においてのルール、特にオンライン会議を円滑・効率的に進めるためのルールに焦点を当て、プレゼンテーションを行いました。さらに後半は、実際に会議の結果として作成される、政策提言や学術論文の作成の手順やコツについて実行委員がワークショップを開きました。このようなワークショップは、英語での成果物に取り組む機会が少ない学生にとっては新しい取り組みであったでしょう。さらに、これらのワークショップをもとに、本年度のプログラムの方向性や求められている活動の姿勢が、参加者全員に提示されたはずです。

事前招集会開催をきっかけに、参加者はそれぞれのテーブルの活動に踏み出しました。テーブルチーフを先頭に、閉会直後からオンラインでチャットを続ける様子や、次のミーティングに向けての計画を自主的に進める様子が表れました。その一方で、まだ英語に自信のない参加者や、ネットワーク環境によって参加にあたり問題があった参加者にはもう少し実行委員からのサポートが必要だったようにも感じました。そこで、テーブルチーフを通して、事前招集会のフィードバックを参加者からとり、今後どのように彼らを支えながら共に活動していくのかを考えました。

2. 事前招集会日程概要

事前招集会日程概要

文責 川口 実のり

日時・場所

2022年 6月25日（土） 20：00～22：30（日本時間）

2022年 6月26日（日） 15：00～18：00（日本時間）

※Zoomを利用して、オンライン形式にて開催

活動内容 学術セミナー・分科会議論・参加者交流

参加者人数 参加者 27名

実行委員 17名

計 44名

DAY1 25 June, 2022	
20:00	事前招集会及び第68回国際学生会議 開催の挨拶
20:15	Ice Break アクティビティ： ウィスパークチャレンジ
20:30	会議概要説明（スケジュールなど）
20:45	テーブルトピック・メンバー紹介
21:00	参加者交流活動：ピクチャープレゼンテーションゲーム
22:15	DAY 1 閉会挨拶
DAY 2 26 June, 2022	
20:00	事前招集会 DAY2 開会の挨拶
20:15	第68回国際学生会議参加に関するワークショップ
20:40	学術活動：討論 “大麻の合法化の是非”
21:30	政策提言、学術論文の作成に関するワークショップ
22:00	テーブル内ミーティング
22:30	事前招集会 閉会の挨拶

3. 学術交流総括

文責 マイ・ラン・チャン

The advance conference, hosted by President Minori Kawaguchi, contained an explanation of the general rules and structure of the Main Conference. It was followed by Academic workshops given by the table chiefs. The conference began with a brief explanation of the rules for the coming sessions, most importantly active participation, turning on the cameras, and actively participating in the sessions. Following that, the attendance rule was made clear to participants. More than three absences resulted in the prohibition from receiving the ISC participation certificate. Then the president explained the layout of the July sessions to ensure participants and table chiefs followed the format for successful sessions and debates. Finally, the first half of the session was concluded by a short debate on the legalization of marijuana. The participants were split into groups to facilitate the discussion, where they each made their claims for or against the legalization of marijuana, using their respective countries as examples/case studies. This has given the members a touch of what the coming sessions would look like.

To ensure participants were equipped with enough knowledge before writing their outcomes, they attended one of two sessions, depending on their table. The sessions, organized and presented by the table chiefs, covered the essentials of academic papers and policy proposals. Table chiefs for tables 1 and 3 presented the Academic-paper-session while Table chiefs for tables 2 and 4 hosted the policy proposal session. Participants were allocated accordingly. During the sessions, the main outline and format of the outcomes were explained with some general guidelines for the participants to bear in mind. Finally, there was time allocated toward the end to answer the participants' questions and elaborate on hard-to-grasp concepts.

第3章

本会議

会議概要

会議日程概要

参加者名簿

全体総括

分科会総括

各分科会総括

成果発表会

後援団体による共同イベント

日本在住学生向け交流企画



1. 会議概要

文責 川口 実のり

正式名表記 第68回国際学生会議

英語名表記 The 68th International Student Conference (ISC68)

会期・場所 2022年6月25日（土）～ 2022年8月13日（土） ※全面オンライン形式にて開催

総合テーマ “Big Step: The New Chapter of the Global Society and Our Lives ”

大きな前進：グローバル社会の変革、私たちの生き方の改革

Table Topics

● Table 1

Journalism: The phenomenon of fake news and disinformation

ジャーナリズム：フェイクニュースと偽情報の現象

● Table 2

Frontier issues relating to recent development in the Law of the sea

近年の海洋法の動向に関して

● Table 3

Smart and Accessible Mobility: Learning from Cities of the World

スマートなモビリティとアクセシビリティ：世界都市の事例をもとに考察する

● Table 4

Social Work: A Big Step Towards Protection of Peace and Human Rights

ソーシャルワーク：平和と人権の保護に向けての大きな一歩

各分科会の最終成果物は、団体のウェブサイトにて閲覧いただけます。

公用語 英語

活動内容 国際問題研究・ディスカッション・各種交流企画・成果発表会

参加人数 日本在住学生 18名（うち実行委員9名） 海外在住学生 27名（うち実行委員9名）

計 45名

参加国・地域国 計17か国

日本国・イエメン・インド・インドネシア・エジプト・オランダ・ガーナ・ケニア・ソマリア・大韓民国・ドイツ・ネパール・南アフリカ共和国・メキシコ・フィリピン・ベトナム・マウレタニア

※なお、上記の国・地域の正式名称は外務省のHPで記載された名称を引用。

(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html>)

2. 会議日程概要

日程	プログラム内容
6月25日	本会議および事前招集会の開会式 事前招集会1日目 各分科会交流会 文化交流企画
6月26日	事前招集会2日目 学術交流企画 参加者交流企画
7月第2週 7月第3週 7月第4週 7月24日 7月第5週 8月6日	各分科会による月例勉強会（1回目） 各分科会による月例勉強会（2回目） 各分科会による月例勉強会（3回目） 月例文化交流企画 各分科会による月例勉強会（4回目） 中間報告会 各分科会による中間発表 レクリエーション企画
8月7-11日	集中分科会期間 8月10日 国際連合(UN) 様によるバーチャルツアー 8月11日 Amnesty International 様による講演
8月12日	最終成果物作成の締切 成果発表会のリハーサル実施
8月13日	成果発表会 本会議および成果発表会の閉会式
9月下旬	各分科会による政策提言を当団体ホームページにて公開。

3. 参加者名簿

Table 1 Journalism: The phenomenon of fake news and disinformationジャーナリズム：フェイクニュースと偽情報の現象	
Aiman Arvian Mosvianto	Indonesia, IISIP Jakarta
Astrid Divana Mahira (Acid)	Indonesia, University of Indonesia
Marian Louise Abio (Mar)	Philippines, University of the Philippines Diliman
Natsumi, Motomura Tan (Natsumi Tan)	Japan & Singapore, 早稲田大学
Takaya Inoue	Japan, 創価大学
Takeru Asakura	Japan, 明治大学

Table 2 Frontier issues relating to recent development in the Law of the sea近年の海洋法の動向に関して	
Haruka Sako	Japan, 同志社女子大学
Hiyori Urata	Japan, 東京外国語大学
Isamu Nakanishi	Japan, アオバジャパン・インターナショナルスクール
Shu Oiso	Japan, 創価大学
Sungwon Yoon	South Korea, 創価大学

3. 参加者名簿

Table 3 Smart and Accessible Mobility: Learning from Cities of the World
スマートなモビリティとアクセシビリティ:世界都市の事例をもとに考察する

Anjali Bhaisora (Angalee)	India, TERI School of Advanced Studies
Chanchal Lalwani	India, Saint gadge Baba University, Amravti, Maharashtra
Chhavi Mahaur	India, Tata Institute of Social Sciences
Dannish Alvi	India, Sri Venkateswara College of Engineering (SVCE)
Natalie Angelina Margot Lydia Stuka (Natalie)	Germany, Ludwigshafen University of Business and Society
Ryuji Otake	Japan 早稲田大学

Table 4 Social Work: A Big Step Towards Protection of Peace and Human Rights
ソーシャルワーク：平和と人権の保護に向けての大きな一歩

Divyal Gupta	India, Tata Institute of Social Sciences, Guwahati
Ibrahim Djibril Kane (Braza)	Mauritania, University of lay Adventists of Kigali
Leiddy Hazel V. Peñamora	Phillippines, University of the Philippines-Diliman
Nkosikhona Tinswalo Khumalo	South Africa, University of Limpopo
Purvasri Das (Purva)	India, Mody University Of Science and Technology

4. 全体総括

文責 川口 実のり

本年度の会議の成果を一言で表すと、「活気」という言葉を私は選択したいと思います。2022年6月の政府の発表を機に、本会議のフォーマットが完全に対面からオンラインへと移行せざるを得なくなりました。その突然の計画変更は、企画側の問題だけではなく、参加者のモチベーションや会議の成果の質を低下させてしまう原因となることが恐れられていました。しかしながら、そこで諦めてしまう私たちではなく、昨年の成果や改善点を踏まえながら、どのようにオンライン会議を盛り上げることができるのか、熟考しました。

主に工夫した点は以下の3点の通りです。

一点目に、私たちは「できるだけ”本会議と同じ感覚”を」モットーに、会議の期間を本会議と同じフォーマットのまま連続した8日間に設定しました。一般的なオンラインのイベントでは、参加者のそれぞれの都合を考慮し、より柔軟で、長期間に渡ったイベント構成になりがちですが、それでは参加者同士の距離がより大きくなるだけではなく、参加者にとっての本会議の優先度が下がってしまうことが懸念されます。しかし本会議では、参加者同士はオンライン上で毎日顔を合わせ、前日の議論内容が薄れてしまうことなく、議論を煮詰めていくことができました。

二点目は、国際機関との合同会議を行いました。国際連合などの国際政治機関は、国際問題の解決にあたりとても重要な役割を担うにもかかわらず、私たち学生の多くはそれらの具体的な活動や構造について詳しく理解していないことが現実です。そこで、本年度は、国際連合とAmnesty Internationalから後援を受け、国際連合本部のバーチャルツアーと国連職員であるMishal氏による平和と安全保障に関するゲストレクチャー、そして、Amnesty Internationalの委員Jaber氏による人権問題に対するディスカッションと講義を開催することができました。これらのゲスト講義は参加者からも非常に満足度が高く、それぞれの分科会での会議の進行における道標になったのではないかと思います。

最後に、本年度は会議を通して、特に分科会の成果に貢献した参加者に対して送られる賞、ISC68Awardを作りました。賞の内容自体は本会議の最後まで参加者には知らされず、参加者の意欲と貢献のみで受賞者を評価しました。受賞者には、自分が読みたいと思う一冊を選ぶ機会が与えられました。私たち若者の世代ではインターネットに1日の時間を割くことが多く、紙の書籍を手にとって楽しむ機会が昔よりもずっと少なくなりました。そこで、ISC68Awardの受賞者には、読書の楽しみや自分の興味を探究する楽しさを大切にして欲しいという願いをこめ、この賞を作りました。

このような3つの点を工夫し、本年度の第68回国際学生会議本会議も無事に終えることができました。最後まで、ほぼ全ての参加者が会議の成果にこだわり続ける様子や、活気の溢れた雰囲気が感じられました。そして、本年度の会議はただ一度きりで終わる経験ではありません。私たち実行委員一同は、会議の参加者同士の関係が長期的に続くものであり、さらに、この会議での学びが、参加者のこれからの研究に対して何かしらの後押しとなることを期待しています。

5. 分科会総括

文責 マイ・ラン・チャン

In this year's conference, we had four topics related to sustainable development goals: goal 3 - good health and well-being. Goal 9 - Industry, innovation, and infrastructure. Goal 11 - sustainable cities and communities. And goal 16 - peace, justice, and strong institutions. Each table is led by passionate table chiefs who are motivated to spread awareness and are willing to take the initiative in encouraging people to collaborate and make a change. Together with the participants from various parts of the world, they all aim to find solutions to our existing problems to bring positive impacts to the global society.

The first topic from Table 1 is: "Journalism: The phenomenon of fake news and disinformation." With this topic, the table aims to find ways to tackle social media disinformation by focusing on increasing media literacy. Their reason for their focus lies in people's biased opinions and spreading fake news through public platforms, which results in 86% of online users sharing that they have believed fake news to be real at least once (Centre for International Governance Innovation, 2019). Especially during the current COVID-19 pandemic, people have become more reliant on social media platforms as means of communication, which increased the effect of disinformation around the globe. Therefore, Table 1 decided that media literacy is an essential skill not to fall victim to manipulative information on the Internet.

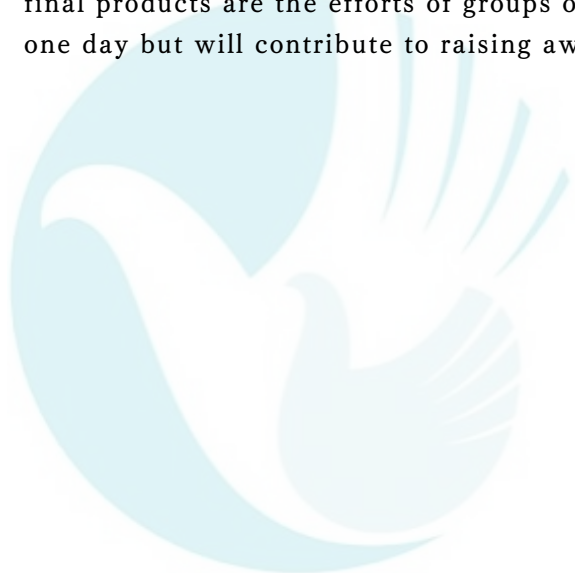
The second topic from Table 2 is entitled: "International Law: Defining and evaluating legal issues in the Arctic region." Table 2 looked through the Arctic region issues on a much larger scale and divided our table into five small groups, explicitly focusing on the issues of national security, living animals, shipping routes, indigenous people, and melting ice with environmental issues over the Arctic. Each topic has different problems and solutions. Table 2 has sought ways to improve the current status quo by developing innovative solutions.



The third topic from Table 3 is: “Smart and Accessible Mobility in Cities: Stepping into the city of people.” Table 3 focused on smart and accessible mobility, which is one of the most critical issues in various cities of the world related to urban transportation and mobility modes. Throughout the study session, all members have done several discussions to dig deep into their knowledge of smart mobility concepts and the importance of accessibility in mobility. Table 3 had several outputs: a Research Report, Presentation, and social media initiative through Table 3’s Instagram account, which aims to raise awareness of the ongoing problems or acts that cities have taken to tackle their issues relating to mobility.

The fourth topic from Table 4 is: “Social Work Practice: Improving the elderly care system.” Population aging is one of the most significant dimensions of global demographic change. Simultaneously, many older people face discrimination and exclusion despite substantial societal efforts. The table discussion and research aimed towards developing more responsive services and policies to make our society inclusive of the elderly. Focusing on the various aspects of elderly health, table 4 was divided into three subgroups, each focusing on the subtopics of health, access to health in terms of financial resources like pensions, insurance, and human resources like skills and people providing healthcare facilities to the elderly. Along with this, table 4 also developed an app prototype for the elderly.

The 68th International Student Conference has become a place where youths gather. Although targeting different goals, they all aim to find innovative solutions for the international community. Following the spirit of our conference this year - “Big step,” we succeeded in bringing together students from various parts of the world with different cultural and educational backgrounds to exchange ideas even during the pandemic through establishing an online platform for discussion. Each table has worked together and put forward solutions for each issue through policy proposals and business plans. Their final products are the efforts of groups of young students, with which they cannot change the world in one day but will contribute to raising awareness and inspiring other people to do the same.



6. 各分科会総括

文責 ラフマ・セリム
編集 川口 実のり

Table 1: Journalism: The Phenomenon of Fake News and Disinformation

<Why this topic? >

As this year's umbrella topic is "Big Step," we believe our table topic, "Journalism: The Phenomenon of Fake News and Disinformation," is a perfect fit for multiple reasons. Firstly, the rise of social media and its accessibility has enabled many people to utilize it as their primary source for news and to publish and discuss news themselves. While this helps many to remain updated with essential information and news, research shows that many people have fallen victim to fake information. For instance, major events, such as political elections or the COVID pandemic, have helped users understand how dangerous misinformation can be. The issues of fake news can range from confusion to doubt, to fear, to factionalism, to health complications, and even to political unrest and tensions. For that, individuals, institutions, and governments realized the importance of media literacy. While many countries have attempted to create their fact-checking sources on social media, this has not proven helpful to all, as it does not prevent the spread of misinformation. Our table advocates for media literacy to be institutionalized in all governments' education systems and teaches readers a handful of measures and precautions to realize fake information. Our research found that media literacy programs are the most effective in educating people of all ages and providing them with the necessary skills to fact-check and realize the fake news from reliable ones on social media.

<July Sessions>

During July, we held four study sessions to plan and work on our outcome as a team. Table one's outcome consists of an academic paper, a survey, and an informative video, including a structured interview. We followed a structured schedule during the sessions to ensure we stayed on track. Throughout the sessions, the importance of cultural diversity became evident to the table chief and sub-table chiefs and the participants. Our diverse backgrounds allowed us to share our ideas, thoughts, and examples from around the world; each could contribute to our knowledge and specialty, which made us all gain new perspectives. Furthermore, the participants' investment and dedication to the table topic (media literacy and fake information) was quite evident as they all had so much knowledge on the subject and were all interested in knowing more by reading the assigned articles and being on track with their assignments. Lastly, having many participants at our table allowed us to each contribute to the outcome. For instance, in the survey, each of us played a role in it according to our knowledge, which included creating the study, sharing it with our respective countries, and analyzing the results. As for the academic paper, each participant was assigned a part of the essay to ensure we all contributed while avoiding a heavy workload.

<Reflection>

Following the structure/schedule for the sessions has enabled us to have beneficial and informative debates and discussions, provide input and work on our outcome products (the academic paper, the survey, the video, and the interview). During the first session, participants were not yet comfortable enough to engage and voice their opinions freely. However, spending approximately 15 minutes at the start and the end of that session to allow the participants to converse freely and play games to get to know each other better got them closer and more comfortable sharing their opinions. From the second session onwards, participants showed their proficiency in debating by stating their views clearly and backing them up with facts/information. This allowed for smooth debates where everyone's point was clearly understood and respected and was supported by evidence. Furthermore, the participants' diverse backgrounds, cultures, and education have allowed much interesting information and points to be presented and have educated all of us, including the table chief and the sub-table chiefs. Moreover, the participants' collaboration has enabled a smooth and comfortable environment where each offered their help in their area of expertise. This has also ensured that the workload was evenly divided, and each participant contributed significantly to each outcome product.

Lastly, the participants' dedication to their assignments was evident through the research and information put into them. The assignments helped me realize and work on each participant's weaker points, which they have greatly improved on as the sessions went by. To wrap up, I believe the sessions were successful as the participants have done a lot of research on the topic, worked on their essay-writing skills, and showed improvements in their debate and presentation skills. All table members benefited from the diverse information that was presented.

<Main Conference>

During the main conference, table members presented and discussed their outcomes to the rest of the conference members. After preparing for this short presentation, each member showed great presentation skills during the conference. Our table began with a small introduction to the topic and its importance, then explained the current government interventions in different countries. The members then delved into our survey, which was conducted in The Netherlands and Singapore, followed by presenting our video on fact-checking, which contained a structured survey in each of the members' countries. Lastly, we provided some suggestions for individuals to realize the fake information and ended with our conclusion. Each member played a part in this presentation.

<Reflection>

As the table chief, I felt proud and satisfied with the members' presentation and dedication from our first session together to the main conference. While I believe that members from diverse backgrounds will enrich the experience of the members, I was slightly worried about how I can ensure that all participants are comfortable and able to share their ideas freely. By allowing the participants to communicate and chat outside the table topic, they slowly grew closer, creating a sense of a team.

The greatest achievement for me is allowing the members to grow their experiences and knowledge. For instance, some members have never created a survey before, others do not have experience writing academic essays, and others have never presented and debated in English. However, throughout the sessions, feedback on their assignments, and the training they received, they each improved in the areas they were least knowledgeable about. Noticing the members improving, each in their respective areas, was my greatest achievement.

While we faced unexpected technical issues, the members presented professionally and passionately. For instance, the video we worked hard on was slightly glitchy, with some parts being completely black with only audio. Additionally, a slide in the presentation was accidentally skipped. Despite all this, the participants remained calm and did their best to present their parts and deal with technical difficulties.

Having seen the participants' dedication and intense preparation for the conference day, I was sure they would perform well. The participants were even practicing outside the practice session and were constantly messaging other members and me with their innovative suggestions and comments to improve the presentation.

While the participants were slightly worried about their presentations and how the day would unfold, they were still excited to finally present their hard work to all the conference members. Furthermore, the participants were greatly invested in all the other table presentations and showed their support for the table presentation. Overall, there was a mix of excitement and slight fear from the conference.



Table 2 The frontier issues about international law over the Arctic region

<Why this topic?>

In the previous years of the International Student Conference, few tables addressed issues of International Law. The difficulty in addressing the issues might be derived from the complex language and mechanisms of international law. However, I strongly acknowledge the importance of international law and relevant organizations in solving global issues, especially those related to neutral zones (i.e., the Arctic Areas). Therefore, I, as the Table Chief of Table 2, decided to raise this unprecedented topic at the 68th International Student Conference. Furthermore, over the course of my university life, I am strongly convinced that more people of my age will gain a deeper understanding of international law in the Arctic Area through interactive and intensive discussions.

<July sessions>

Table two is led by Yingjiao Qiu and the sub-table chiefs, Lan, Evan, and Zackey. In total, Table two held two online study sessions in July. Team members were very interested in international law issues as well as in the Arctic region. In the first study session, we did a brief introduction about the table topic and gained background knowledge that would be useful for the rest of the conference. In the second study session, tasks were distributed to each team member to create the final outcome, which is a policy proposal. The distribution of tasks was according to the five scopes of the International Law of the Sea around the Arctic region: national security, shipping routes, environments, indigenous people and living animals. Members explored the topics assigned deeply and shared the information and knowledge with others in the form of presentations during the session. In order to get members connected on a personal level, our table held interactive activities, such as debates, discussions, and occasionally free talks.

<Main conference>

The main conference began with reviewing the content of the July sessions in the form of presentations. Also, table two was working on writing a policy proposal to raise awareness of the problem around the Arctic region from an international law perspective. Accordingly, it was important to understand the specific format for writing a policy proposal and the difference between a policy proposal and a normal essay. Needless to say, each member did not focus only on completing their own tasks but also on providing opinions on other members' parts. Overall, we analyzed national security, environmental changes, indigenous people, living animals, and shipping routes in the policy proposal. The arctic region has very abundant natural resources, countries are gaining power over there; also, if some urgent issues happen in the Arctic, it may reshape the whole global situation.

<Reflection>

Throughout the conference, team members put a big effort into the preparation as well as the discussions. From my perspective as the Table Chief, each member's hard work and motivation were impressive and inspiring. I want to express my deepest appreciation to all table members, sponsors, mentors and my university professors who helped our table to come up with the solutions to the topic I am aspired to. I believe every member of our table gained deeper knowledge about the International law of the sea and also how the law works over the Arctic region. Furthermore, I hope that the learning at this conference provided them with guidance towards their future studies or careers. I also appreciate the support of the sub-table chiefs, who helped complete tasks and organize activities.

To conclude my reflection, it was a very good opportunity for me to expand my connection with table members and to work with them to solve the issue that I am interested in. Attributing to the complexity of the problem of International Law, there remains room for further exploration of this topic. I believe people who participated in this year's conference had a great moment of teamwork and learning experience, which will help them take a big step in their current and future pathways.

Table 3: Smart and Accessible Mobility: Learning from Cities of the World

<Why this topic?>

Today, many cities of the world have developed fast which attracted more people to live in a city environment. Based on the UN (2018), by 2050, almost 65% of the world's population is expected to be living in cities. Living in a city may increase the opportunity to have a better quality of life in many aspects. On the other hand, as the world's cities continue to grow and expand, it is starting to generate numbers of urban mobility issues like congestion, longer time of travelling inside cities, inequality, mobility inadequacy, etc. This is caused by the infrastructure increment that can't compete with the unprecedented population growth. As the urban population grows because of rapid urbanization, the infrastructure fails to accommodate the entire population, which creates mobility issues, such as traffic jams, accidents, etc. Not to mention that several population groups cannot access the city because of the unreliable facilities to mobilize. Table 3 focused on smart and accessible mobility, which is one of the most important and talked about issues in various cities of the world. Smart and accessible mobility is relevant, and it is important to learn and study more about the topic to improve the quality of life of the inhabitants equally.

<July Sessions>

Table 3 is led by Amyra Aliy (Table Chief) and accompanied by two sub-Table chiefs, Minhwa Jeong and Miyu Kobayashi. We had 8 participants at the start of the conference, but one didn't participate in the other sessions for the rest of the conference. We started the activities in the first week of July, less than a week after the advance conference. In July, we had around six sessions, including a lecture session by a guest speaker. The table also has individual assignments which require all table members to write an essay and make a presentation about their cities. Table 3 is also under the mentorship of Zulfikar Putra, PhD student of UCL, United Kingdom, and lecturer from Universitas Gajah Mada.

The first session was spent working through the study plans and research report writing plan. The second study session was spent discussing the concept of mobility in general and smart mobility. The third study session was filled with a lecture session titled The Importance of Accessibility in Smart Mobility by Deliani Siregar, Sr. Urban Planning, Gender and Social Inclusion Associate of ITDP Indonesia, which was attended by Table 3 members and ISC 68th members. The fourth study session was the day of reflection and discussion about the lecture session. The fifth and sixth study session was the day of individual presentations. The best essay and the best presentation will be awarded a certificate of appreciation.



<Main Conference>

During the Main Conference week, Table 3 had 7 days working on the final product of the table until the final product was presented on the Final Forum day. Unfortunately, 1 person (Akane) suddenly left the table due to their personal schedule. During the days of Main Conference week, almost all of the table members were present and participating in all of the ISC agenda, despite time differences. While they attended the ISC agenda, we were also working on our final product. Everyone present at the main conference and final forum day, except 1 person who had an exam on the same day as the final forum, his part was done by other table members. Table 3 invited our mentor to review and give evaluation of Table 3's presentation. After the Main Conference was over, the table chief and sub-table chiefs announced the best essay (Anjali) and the best presentation (Daanish) from Table 3. Also, on the Final Forum day, the table chief and sub-table chiefs awarded 2 table members with the best participants for ISC award (Chhavi and Natalie).

<Reflection>

Since the first time I (Aliya, Table Chief) met all of the table members in their individual interviews, I feel and saw that everyone that registered to Table 3 is very passionate about the topic that I brought up on our table. They write very good answers for their registration form too. From there, I curated all the members and we ended up accepting 8 table members. Overall throughout our study sessions and activities, all table members are very participative and very active in all and every single of the study sessions that they attended. They were enthusiastic and open to discussion with fellow table members too. Everyone at the table is very supportive and encourages each other in studying the materials too. Personally, I am very intimidated yet proud because my table members are very smart and alert of the topic. We can learn and teach each other about our own insight on things and I think it's a rare experience that I (nor all the table members) can have. We had a really great time and a good performance as a team/table from Day 1 until the final forum, in which we got very nice feedback from our mentor. Unfortunately, since I have so many issues with my life outside the ISC, our final product is a bit delayed and I need to work on it as soon as possible.



Table 4: Social Work Practice with the Elderly: Big Step towards Protection of the Elderly

<Why this topic?>

With population aging as one of the most significant dimensions of demographic change, we at Table 4 decided to focus on this global phenomenon. The share of the elderly population is estimated to increase from 1 billion in 2020 to 1.4 billion in 2030, and by 2050 it is projected to be doubled to 2.1 billion. Despite significant efforts, we still witness many older adults facing discrimination and exclusion. Today, when the Sustainable Development Goals (SDGs) promise to 'leave no one behind,' it entails that every individual is included in the developmental process. As students, members of table 4 wanted to discuss the problems faced by the elderly with respect to Social Work professionals from Japan and relate it to countries from all over the world. Together, we came up with recommendations and small steps toward implementing a more inclusive and elderly-conscious society.

<July Sessions>

During July, we held study sessions to plan and work on our outcomes together. We had five participants at the start of the conference, but we ended up being four participants from the second study session until the rest of the conference. We started the activities in the first week of July, such as getting to know each other. At the same time, we shared relevant articles and short films that each participant could watch during their free time to have a deeper understanding of the topic. Once the policy proposal was divided and distributed to the participants, we asked them to do further research and create a unique approach to solving the social issue with a focus on Japan, the Philippines, and India. Overall, we had around four sessions.

The first session was spent researching the family structure and status of the elderly in each participant's country. The second study session discussed the study plans and the outcome of our final proposal. In the third study session, one of our participants, Purvasri Das came up with an idea to launch a prototype application for the smartphone to help the elderly. The fourth study session was the day of planning and discussion for the main conference.

<Main Conference>

During the Main Conference week, Table 4 worked on the final product of the table until the final product was presented on the Final Forum day. Purvasri, after coming up with the idea of the application, was tasked to spearhead the programming. At the same time, the design was a combination of our opinion based on our research and Purvasri's conducted survey. All the participants were active both for the ISC agenda and the discussion of the topic. Despite the time differences and internet connection limitations, everyone tried their best to join the sessions. However, during the final forum, two people were absent. To make up for it, one person made a video for his part, and the other was proxied by the other member. Everyone showed great teamwork to successfully present the final product and show the video of the application that has been made.

For this year's ISC, every table had to give ISC awards to 2 participants. For table 4, we have decided to give the ISC rewards to 3 people because of their significant contribution and hard work for more than a month as a team.

<Reflection>

For the first time, we met as a complete tables team, and I was surprised at how they were so easy to communicate with and active. Table 4 had 5 participants in the first place, but 1 left and made table 4 with the fewest member among other tables. But it did not even lower the motivation of each member. They did their best for ISC and motivated me to prepare better for the sessions. Since all of them are active, sometimes I found it hard to end the debate of each member but proud at the same time because of their courage and excitement to speak up their thoughts. I did not expect that we finished our proposal and even launched the idea of an application for the elders as our final product. We built a strong connection with each other. We had a lot of difficult times during the conference, but we pushed through it. I hope we can keep this connection always.

As a sub-table chief and the event being done online, one of my biggest worries was that the participants would lose interest and it would really negatively impact the policy proposal creation. Imagine my relief when the exact opposite happened. Despite losing a member, it didn't feel like it because of how enthusiastic and fun the remaining participants were. You could really tell that they wanted to make a difference. I was amazed with how creative their minds could be when thinking of possible solutions for our chosen societal issue. I never would have thought of an application as a way to deal with the problem of the elderly population. The participants did not only have the creativity to think of unconventional and new approaches, but they also had the courage to put it into action and the determination to make it work. It was truly an honor and a once-in-a-lifetime experience to have worked with such amazing and brilliant people. My faith in the youth has been restored.



7. 成果発表会

文責 金高 哲大

本会議の最終日にあたる2022年8月13日に、オンライン（Zoom）にて、成果発表会を開催いたしました。成果発表会は、各分科会の議論や提言内容を一般向けに公開することを主目的とする弊団体最大のイベントです。また、観覧者と各分科会の学生が交流できるセッションを設け、共に考える場とすることを目指しました。当日は多くの一般観覧客者、来賓客の方々にご参加いただきました。当日のプログラムは以下の通りとなります。

	時間（日本時間）	プログラム内容
第1部（開会宣言）	14:00～14:10	集合・プログラムの説明（使用言語: 英語（英）/日本語（日））
	14:10～14:20	開会宣言（英・日）
	14:20～14:35	第68回国際学生会議活動報告（英・日）
第2部（分科会発表）	14:35～15:50	分科会成果発表会概要説明（英・日） 分科会1・2・3・4による最終成果発表（トピック紹介：2分／発表時間：15分）（英）
第3部（講評）	15:50～16:20	フィードバックセッション（英）
第4部（閉会宣言）	16:20～16:30	閉会宣言（英・日）
第5部（交流会）	16:30～16:45	観覧者向け交流会（英・日）

- 開会宣言：第68回国際学生会議代表による開会宣言をいたしました。
- 第68回国際学生会議活動紹介：本年度、6月25日～26日に開催された事前招集会から8月13日までの約3ヶ月のプログラムを詳細にて説明しました。4つの分科会に設置した学術交流や、毎月の文化交流企画の様子を紹介しました。
- 各分科会による成果発表：各分科会が設定した課題と提言の内容を15分間の発表にまとめ、来賓客、観覧者向けに発表しました。
- フィードバックセッション：各分科会の発表内容に対して、多くの観覧者の方々から、ありがたいお言葉をいただきました。
- 閉会宣言：第68回国際学生会議代表より閉会宣言を行いました。
- 観覧客向け交流会：当会議参加者と観覧客が交流し、自由歓談や意見交換ができる時間を設けました。

※ 成果発表会の模様は、弊団体のYouTubeチャンネルにて全編をご視聴いただけます。
<https://www.youtube.com/watch?v=IS4ZrqqDWq4>

8.後援団体による共同イベント

文責 川口 実のり

国際連合：国際連合本部バーチャルツアー・平和と安全保障に関するパネルディスカッション

国連バーチャルツアーは、オンラインの環境で、国連の本部を探索することができます。ツアーは特定団体向けのプログラムであるため、本会議の参加者は、ここでしかない経験をすることができました。ただ、本部内の仕組みを見るだけでなく、国連の職員の方から、国連の歴史や国連の地球規模の課題に対処する取り組みについてを学ぶことができました。さらに、後半のパネルディスカッションを通じて、国連が軍縮、平和と安全、人権などの問題にどのように対処しているか、また持続可能な開発目標をどのように支援できるかを学びました。参加者は、どのような些細な質問も投げかけることができ、将来国連のような国際機関で働くことにより強い興味を持った様子でした。特に、学生の私たちにとって、世界規模の国際機関は普段の生活で直接的な関係があるとはいえず、少し距離が遠い存在かもしれません。しかし、このように国連の働きを職員の方から直接学ぶことで、私たちもそのような機関を通じ、国際問題の解決へ行動を起こすことができるとポジティブな刺激を受けました。このように、魅力的な教育体験を提供してくださった国際連合からの後援に私たちは深く感謝申し上げます。

Amnesty International:人権問題に関する学習イベント

Amnesty International は、世界中の人権の侵害に関する問題について調査し、様々な方法で世界に問題解決を呼びかける国際機関です。その活動は、レポートや提言の提出から、人権を略奪され不況な状況にある人たちのための対人支援や募金活動にまで渡ります。私たち若者世代の多くは、人権問題の深刻さを理解していても実際に問題解決に向けて行動を起こしたことがないのが現実です。このイベントでは、Amnesty International の職員であるMazen Riad Jaberを招き、参加者は、NGO組織がどのように国際政治に貢献してきたのか、また、そのような貢献と人権活動の関係について学びました。さらに、Q&Aセッションを通じて、私たちは、一人一人がどのように人権問題解決に向けて貢献できること、国際人権法の仕組み、これまでの主な人権問題に対する国際組織の対処について詳しく伺うことができました。

9.日本在住学生向け交流企画

～One Day ISC68～

文責 川口 実のり

コロナ禍でもやっぱり対面での活動ができたらなあ。One Day ISC68はそのような参加者と実行委員の声に応えるため企画されました。対人感染のリスクを最小限にしながら、国際学生会議ならではの学びのチャンスに参加者に提供するにはどうすればいいのか。さらに、来年度の団体の活動に向けて、国際学生会議の良さを日本在住の学生の間でもっと高めるにはどうすればいいのかを、実行委員で話し合いました。

イベントのメインテーマは、「歩いて学ぶ。」私たちの世代は、インターネットや文面上で社会・国際問題について理解し、考えるのが主流になっています。その一方で、そのような問題が現実的に社会でどのように存在し、影響を及ぼしているのかということに関しては、距離の遠い話であるということが、多くの学生にとっての現実であります。その考えをもとに、One Day ISC68では、実際に街を歩き、机上の問題を実際に経験したことのある方々と会話を交わすことで、それらの複雑さや仕組みを学生参加者がより理解し解決法の考慮につなげるということ、目標として設定しました。

今回選択された議題は、「The Effective Inclusion of LGBTQ+」と「The Future of Smart City and Big Data」です。「The Effective Inclusion of LGBTQ+」では、LGBTQ+の集まる街として知られる、東京の新宿2丁目のなかでツアーを行い、実際に東京、そして日本がジェンダーマイノリティにとって生活しやすい環境であるか、ということについて研究しました。近年増加し続けるその人口にかかわらず、日本では、LGBTQ+はまだまだマイノリティと区別される存在であり、その理解がない人からの差別や誹謗の対象となっています。そして、そのような差別を乗り越えるためには、人々が、LGBTQ+を、マイノリティというカテゴリーに分類し、異質化するのではなく、共存する社会を作っていくための相互的な努力が必要です。従って、私たちは当事者とできるだけ同じ目線に立ち、どのように日本社会がより平等で、個人の性を尊重できる環境に発展していくことができるか、このイベントを通じて研究することを目指しました。

一方で、「The Future of Smart City and Big Data」では、東京・日本の未来都市についての研究が行われました。急速に進行する自動化・デジタル化は、身の回りの電化製品だけでなく、街の主要な構造として人々の暮らしを大きく変えてきました。その変化は、街を歩けば、駅のデジタル設備や、あらゆる場所に備わった電光情報掲示など、様々な側面で見受けることができます。しかしながら、課題やリスクのない発展を目指すのは簡単なことではありません。市民の個人情報の漏洩や、伝統的文化背景の衰退など、未来の都市を構築していく中で、社会が忘れてはならないこと、守っていくべきものを考えることが、大切であると考えます。そこで、東京都内の中でも特に街づくりの技術が発展したお台場、スマートシティ竹芝・豊洲を訪れ、専門家の方と対話をしたり、街の構造にどのような技術の工夫が現れているかを目で見、触れて学ぶことが目標でした。

終章



謝辞
活動の様子
ご協力いただいた方々

1. 謝辞

文責 田中 陽子

ご協力いただいた皆様へ

本会議を運営するにあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。

国際教育振興会賛助会の伊部様には例年に引き続き終始丁寧なご指導を賜り、今年度も全面的にご協力いただきました。ここに深謝の意を表します。

三菱UFJ財団 松浦様 渡邊様にも今年度の活動に多大なるご協力を賜りました。大変感謝いたします。

加えて、石田寛様には例年に引き続き推薦状執筆にご協力いただき、また石田博信様には決算書提出の際に大変お世話になりました。感謝申し上げます。

トランスアクト株式会社の橘様にはご協賛を承諾していただいた上に、適切な助言を賜りましたこと深く感謝いたします。

株式会社ジャイロス 山口様にもご協賛いただいたのに加え、世界情勢に関する意見交換をさせていただきました。誠にありがとうございました。

NOMON株式会社 澤田様 久保様、株式会社アゴスジャパン 丸山様、株式会社シグマライズ 斎藤様にもご協賛に協力いただきました。感謝申し上げます。

Youth Consortium 里村様 米元様には充実した会議の運営ができるようさまざまなご提案を賜り、終始弊団体の活動を暖かく見守っていただきました。本当にありがとうございました。加えて、株式会社MIRAILing池上様にも昨年度に引き続きご後援いただきました。ありがとうございました。

国際連合並びにAmnesty International 様には、本会議期間中にご講演いただき、世界情勢や国際問題に関する刺激的な議論を賜りました。御礼申し上げます。

OBOG会開催にとどまらずあらゆる面で本会議に関する多大なる協力を賜りました国際学生会議OBOGの馬淵様には心から感謝の意を表します。その他OBOGの方々にもご助言を賜り、充実した会議の運営を成功させることができました。ありがとうございます。

そして、クラウドファンディング支援者の方々にも弊団体の活動を応援していただきました。大変感謝申し上げます。

2. 活動の様子

分科会 1



2. 活動の様子

分科会 2



2. 活動の様子

分科会 3



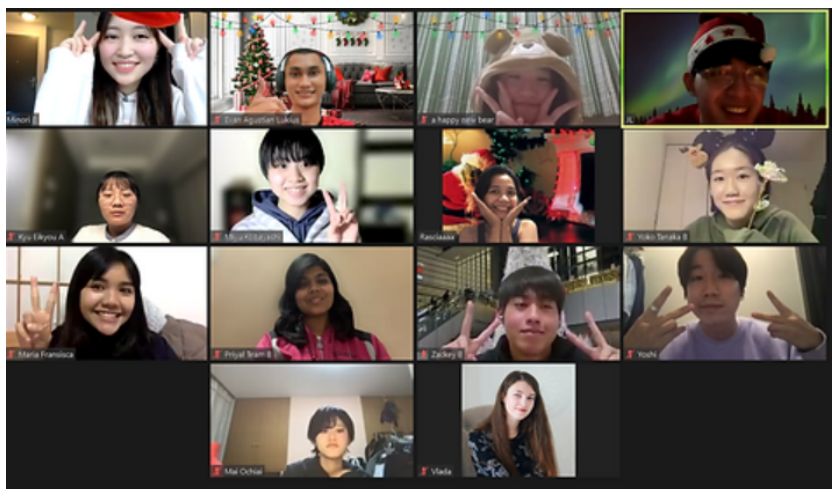
2. 活動の様子

分科会 4

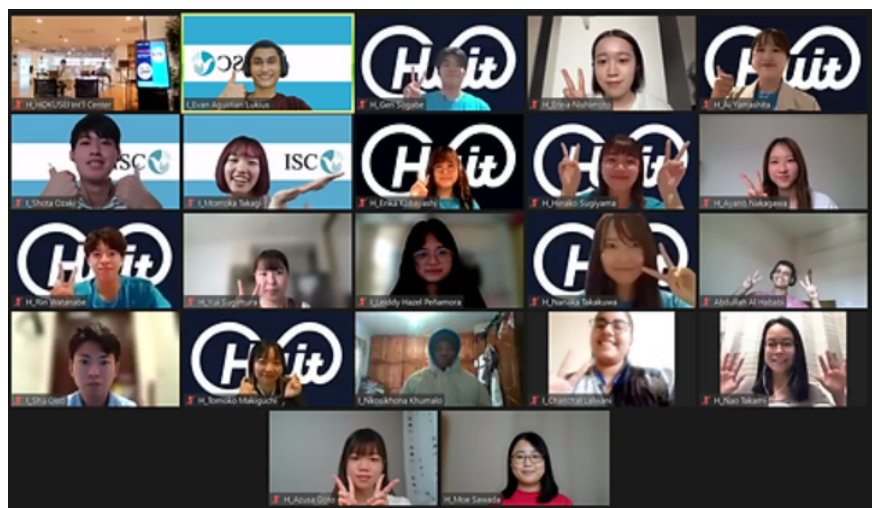


2. 活動の様子

その他

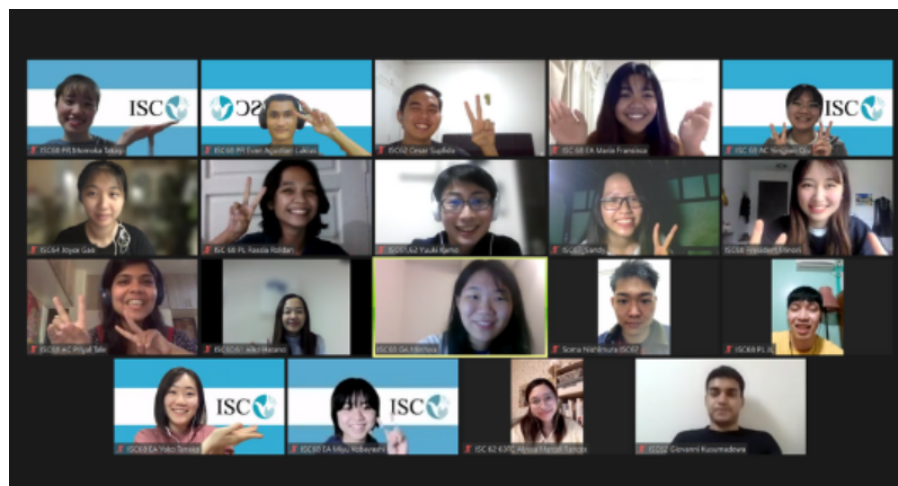


クリスマス会



コラボ
イベント

OBOG会



3. ご協力いただいた方々

協賛企業



トランスアクト株式会社 様



株式会社ジャイロス 様



NOMON株式会社 様



Maximize Your Value

株式会社アゴス・ジャパン 様

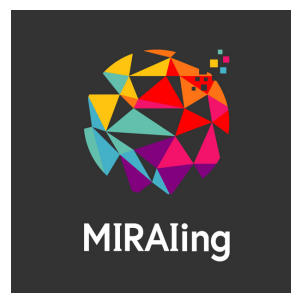


株式会社シグマライズ 様

後援企業



Youth Consortium 様



株式会社MIRAiling 様

助成

国際教育振興会賛助会 様
双日国際交流財団 様
三菱UFJ国際財団 様

後援

アムネスティ・インターナショナル(Amnesty International)
国際連合(United Nations)

より多大なるご支援をいただきました。

クラウドファンディング支援者の皆様（敬称略）

馬淵 将明
スタバおじさん
えう
筑井為行
大金 正知
tk_BunkaNet
Kitaji
松本 滉司
宮本 大輝
アクエリアス
Kanlongtham Damrongsoontornchai
Shiki Aoyagi
Takeshi S. Komatani

以上、13名の皆様にご支援いただきました。

学術面でご協力いただいた皆様

成果発表会

国際教育振興会賛助会会長 藤崎一郎様
アムネスティ・インターナショナル(Amnesty International)
国際連合(United Nations)

分科会活動

テーブル2

東北大学 西本 健太郎 様 (メンター)

テーブル3

ユニバーシティー・カレッジ・ロンドン博士課程、及びガジャ・マダ大学講師 Zulfikar Putra 様

以上の方々を始め多くの方にご協力いただきました。
この場をお借りして心より御礼申し上げます。
皆様、誠にありがとうございました。





第68回国際学生会議 事業報告書

発行責任者：川口 実のり

編集責任者：川口 実のり・金高 哲大

発行：第68回国際学生会議実行委員会

〒168-0082

東京都杉並区久我山4-9-11コスモリヴェール久我山202

連絡先：japan.isc68@gmail.com